

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」
2013年度第3回研究会（通算第7回）

日時：2014年2月28日（金）14:00-19:00

場所：本郷サテライト7階

使用言語：日本語

（1）石垣直（沖縄国際大学） 「台湾原住民研究と空間構想力：ブヌン社会における土地・文化・アイデンティティ」

（2）西井涼子（AA研所員） 「東南アジア地域研究と人類学」

*概要

石垣氏の発表は、台湾研究の研究史の流れの整理と、現在彼が調査している先住民運動の問題を取り上げたものだった。慣習調査や土地制度に関わる研究史と現代台湾原住民の政治は一見別々の研究課題に見える。しかし興味深かったのは、戦前からの台湾原住民研究史を紐解くと、そこで浮き彫りになった研究知見が基盤となって、先住民研究を支えていることであった。つまり、地域固有の民族誌的研究の蓄積が基盤的視座となつて、現代的現象に対する人類学分析の方向性のある程度定めているということである。この点で、研究の蓄積はフィールドにおける人類学の空間構想力を規定しているということがうかがえた。もう一つの西井氏の発表は東南アジア地域研究と人類学の関係をたどったものである。そこから出された結論として重要なのは、地域研究が対象規定的な思考をするのに対し、人類学は研究者の身体を媒介にした出来事規定的思考をする点である。この点で、東南アジアにおける 1950-70 年代の民族誌は、人類学理論に新たな視座を与えている一方で、東南アジア地域の学知に還元されないことがわかった。その一方でその背景に、大量の地域研究の蓄積があることを認識することの重要性も浮き彫りとなった。

台湾原住民研究と空間構想力

——ブヌン社会における土地・文化・アイデンティティ——

Taiwan Indigenous Studies and Spatial Imagination

Land, Culture, and Identity of the Bunun

石垣 直

台湾のオーストロネシア語族系先住者集団（公称で「原住民（族）」）に関する社会・文

化人類学的研究は、日本植民地期より本格化した。それから一世紀の時が流れ、台湾原住民研究は、①「伝統文化の記録・保存」、②「変化の中の文化」、③「現代における文化・文化復興」という研究史を歩んできた。1999年よりブヌン研究を進めてきた発表者は、社会制度・組織の地域差に注目しつつ他地域との比較を行った馬淵東一の議論の影響を受けながら、親族・婚姻の現代的状況、原住民族運動の歴史と現状、ルーツ探し活動および地図作成の試み、土地制度変遷などの問題を扱ってきた。その際に発表者は、諸文化や様々な社会現象は、単独で存在するのではなく、地理・環境的な背景の下で歴史的に形成されてきたものだとすることを強く意識してきた。したがって発表者の研究は、人の移動や生活環境の変化と文化変容、さらには政治・経済・社会状況と諸アクターの布置に、絶えず注意を払うものであった。こうした視座は、グローバル／ナショナルな背景を踏まえながら、対象社会の実情を歴史的かつ立体的に描き出すことが求められている現代の人類学研究に、必要不可欠なものだと考える。

東南アジア地域研究と人類学

西井凉子

東南アジア認識は、第二次世界大戦前 インド文明・中華文明の辺境である古代史、ヨーロッパ植民地—ヨーロッパ諸帝国の拡大、そこからの独立、ナショナリズムの立場から、自律的古代国家形成や近現代の民族闘争、1970年代以降、アメリカ式東南アジア地域研究が、各国史を超えた東南アジア地域世界全体の個性・独自性をつくるというように変化してきた。東南アジアの地域研究と人類学研究は、ともにリアリティに接近するという目的をもっている。しかし、地域研究が特定の場を設定して、一瞬でも静止画像として多角的に描こうとする「対象規定的」とでもいう特色をもつのに対し、人類学研究はフィールドワークの場に身体を媒介として感受した動きのなかから捉えたものを描き出そうとする「できごと規定的」特色をもつという違いがあるといえよう。もっとも、実際の研究においては、これらは強調の程度の違いであり、画然と区分できるものではない。